時代鏡

三拾五篇

為永春水作

歌川国貞画

へ13
3031
6

此書業漢河氏鏡
三十年間の未家
春名化國兵衛彫板

三十五編下
春扇作
國貞画

北雪美談時代鏡
仕題曲五國象
三十五編上

美婦鏡
時代鏡
丙寅新春
為和春画作
梅堀横國貞画
三拾六編上
為林堂梓
三拾六編下

心こそ駒の心やうなれと。貞婦は
ちゝ程恭しく守らく。迷ひ易きの性ハ
貞婦と賞せも。淫婦奸夫と性ハらるゝ。其本心ハ一ありて。
何もての明ろ好ゝぬハあゝ孫ど。見るにつき聞ふつけ迷ふ
よ。迷ふされて。心の駒ふ心を宥すと宥さるとになるゝ
甚しきかゝりて。今此編を顯す所の。阿无天些四郎が
如きなり童蒙心ふ和して。むの由断爲ぬゆゆ。と真顔で
說くも久しかるゝ。老悖者ハ笑ん。

元治二乙丑孟春

爲永春水記

藤浪春庶

多賀一槑
小田大江図書

白山
友冬

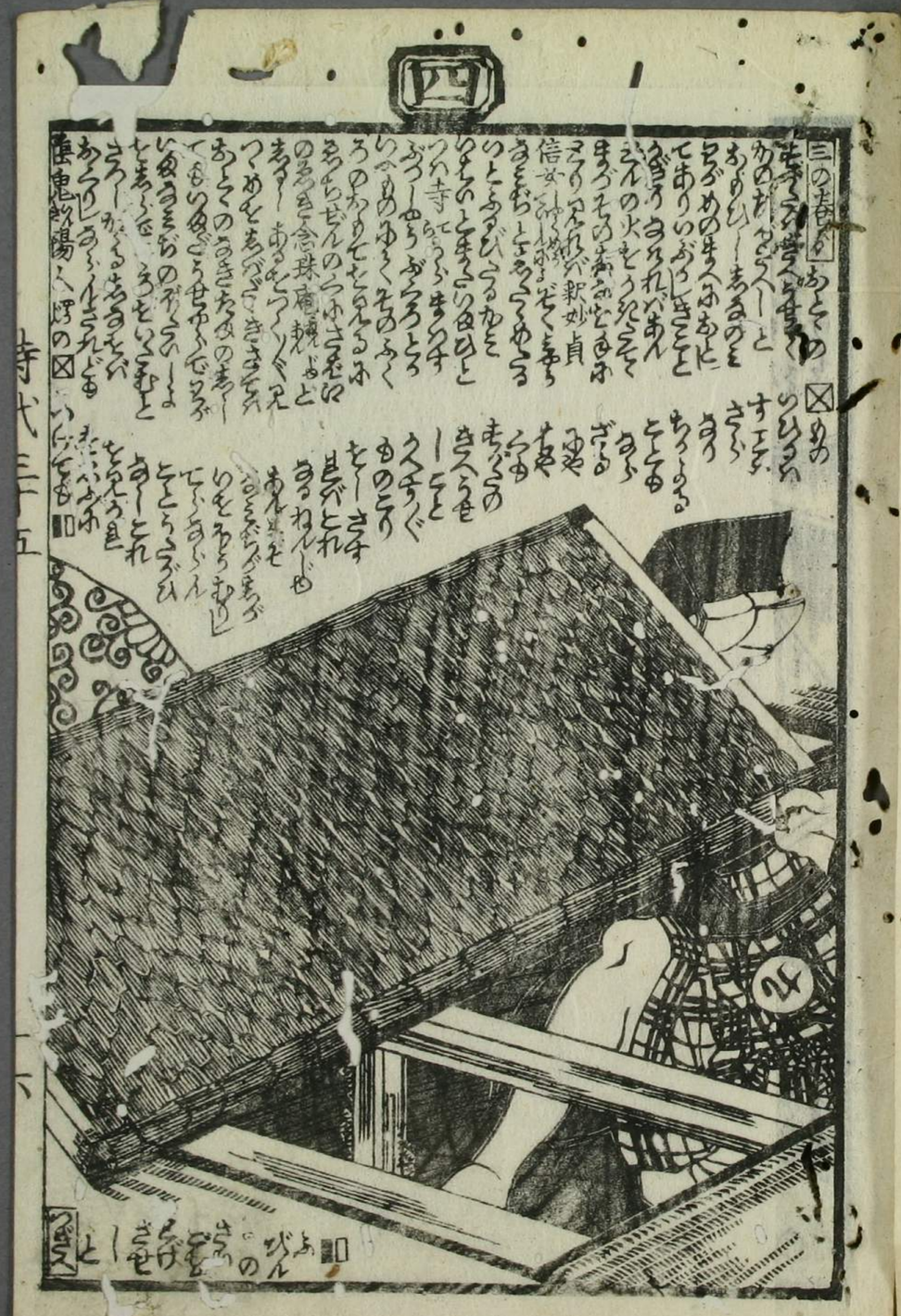
松

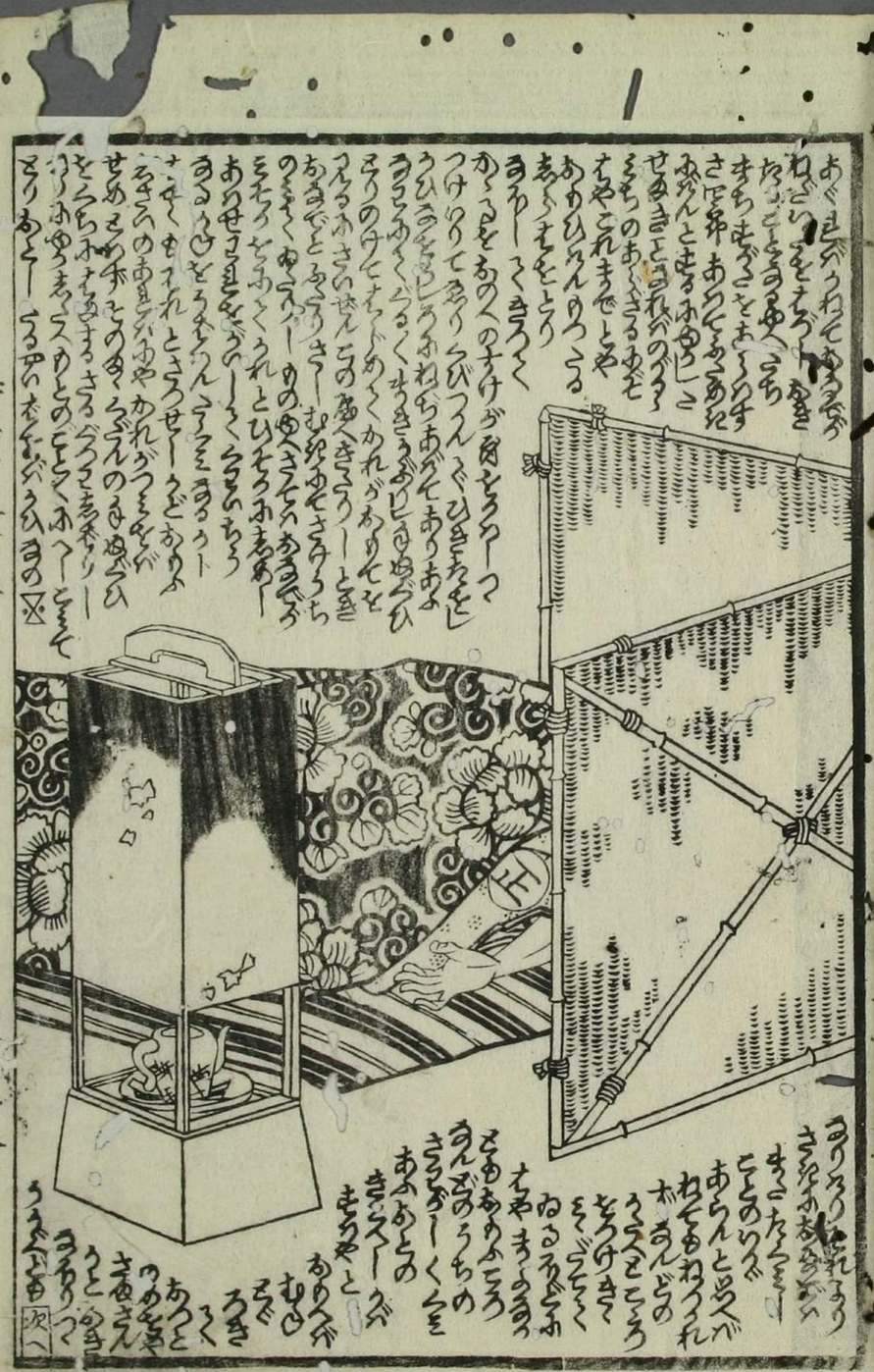
正
尾
二の巻
一の巻

越
松
竹
丹

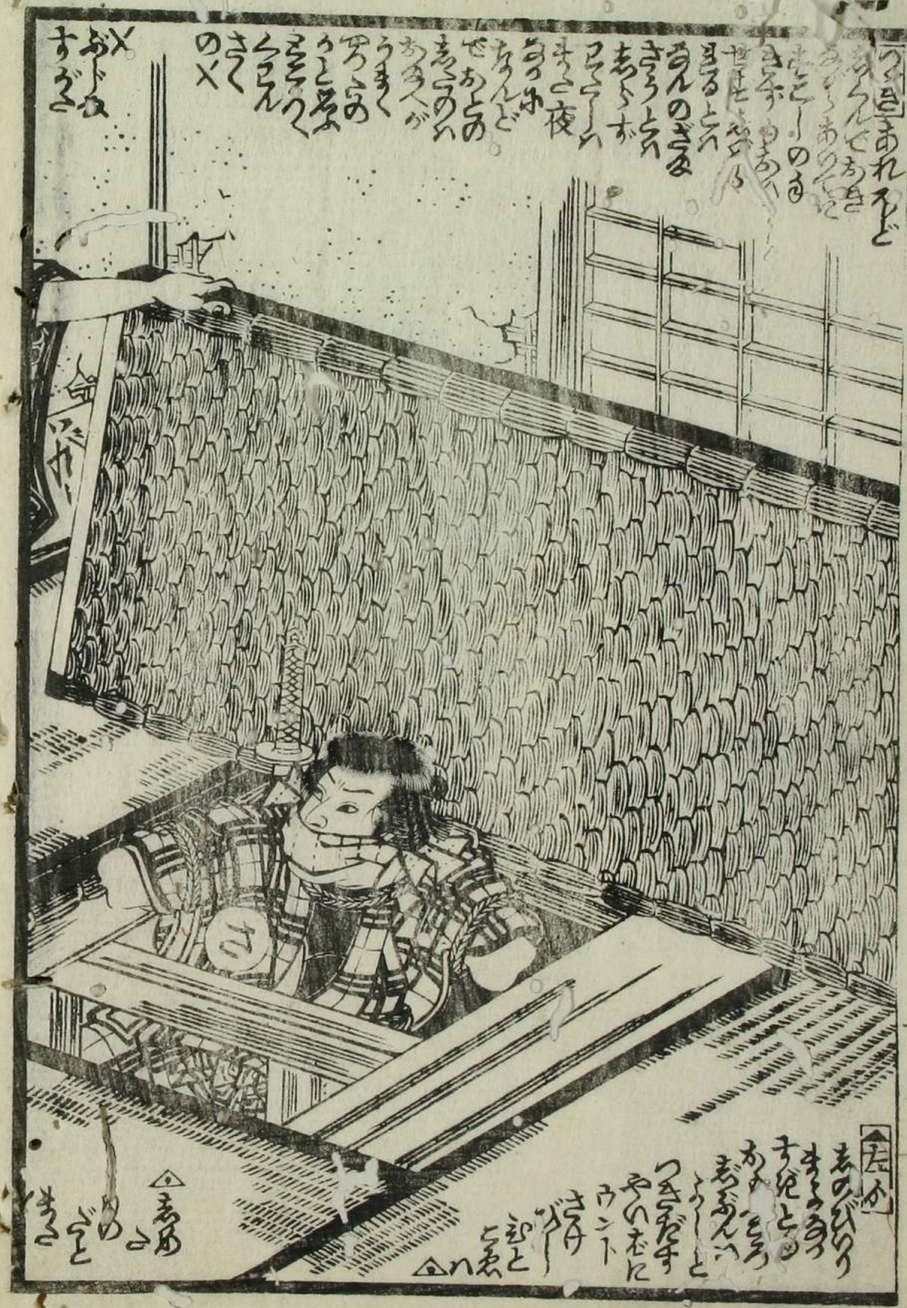
宁
毫

國貞画　春水作





正
尾



春水作 國貞画

天下の品物草木禽獣虫魚甲貝あの〳〵三百六十四品の群類なりといへども此品物いづれも人間の助となりぐ〵んりのなし

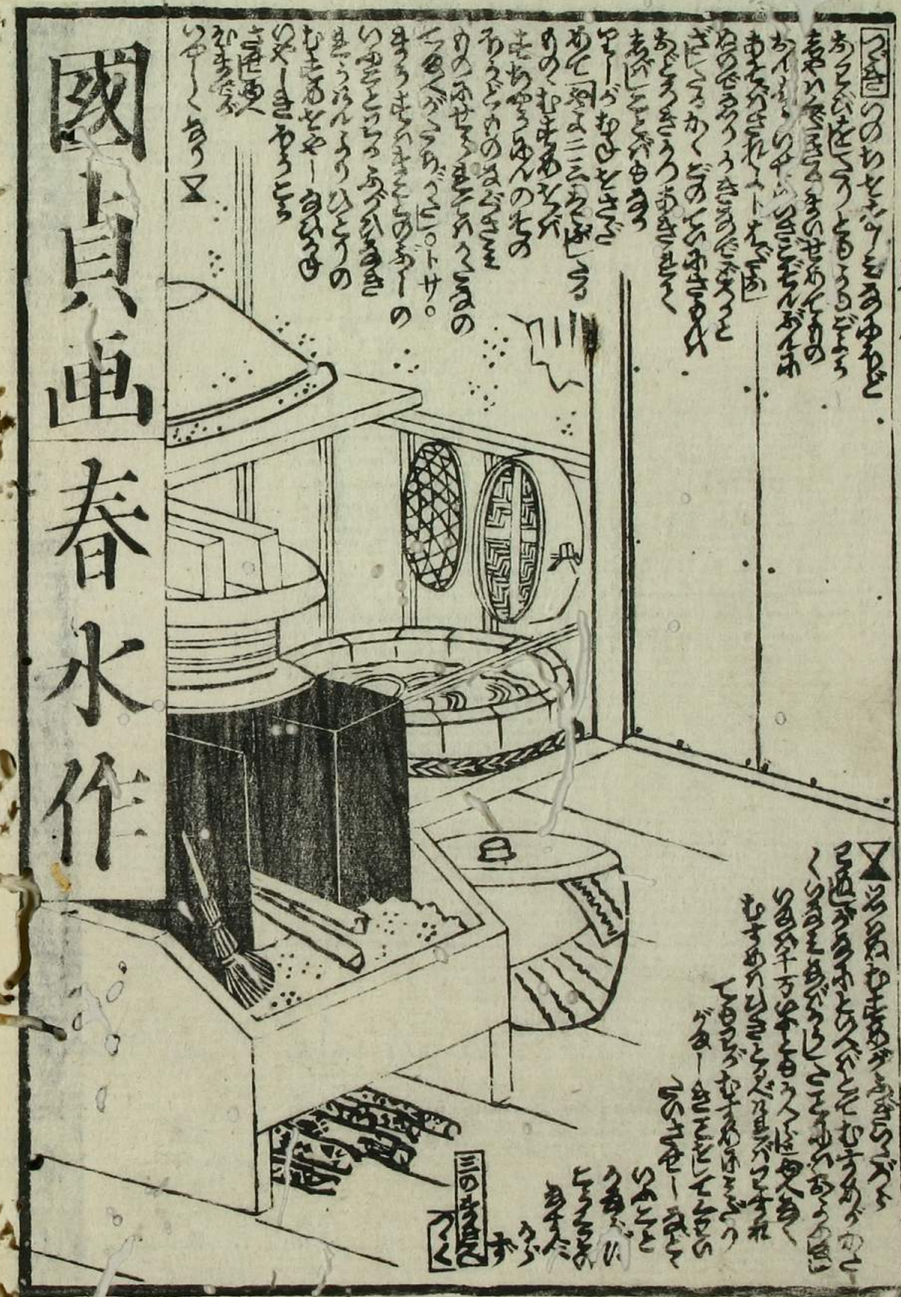
そも〳〵中ごろ虫の部三百六十四品い悉く人間ふ害あり所い時候の不順なるより生ずるゆゑ〳〵ぞ就中蜚い幾錦さま〳〵ぞ人のこゝろを惰ぶそるより分限を忘れ不敬を生しなるひい淫乱の媒となり果い命を殞すとゆいふる然ば凶國の悪虫なりとて君子い是を惡むべしこれ蜚も化して蝶となれば這も一類とゝるべしこの春辰竊ふ蝶を役して国家を覆さんと謀るるかの虫類ふ害なりといふその呼以ふ因めるゆゑなりけり

丙寅初春

爲永春水記

浪人小柴左門
左門女房濱風
浪花の市客
津出屋
二三太

御宿


國貞画
春水作

三
左

尾
正

正
筆

尾
文
化

爲永春水作　歌川國貞画

慶應三丁卯年新刻目録

北雪美談　時代加賀實　廿六編　爲永春水作　廿八編追　歌川國貞画

雜談兩夜質庫　六編　爲永春水作　七編　一陽齋豐國画　一せち一ぱんよのまちぐち　出板　門人　國久画

池園との語　初編　二編　山々亭有人作　歌川國貞画

庭訓武藏鐙　應賀作　六編揃　國貞画

地本草紙問屋　若林堂　芝神明前　若狹屋與市梓

作 爲永春水著述

画 梅蝶樓國貞筆

時代のみ美

三十編

第廿九号 板元 栄蘭堂

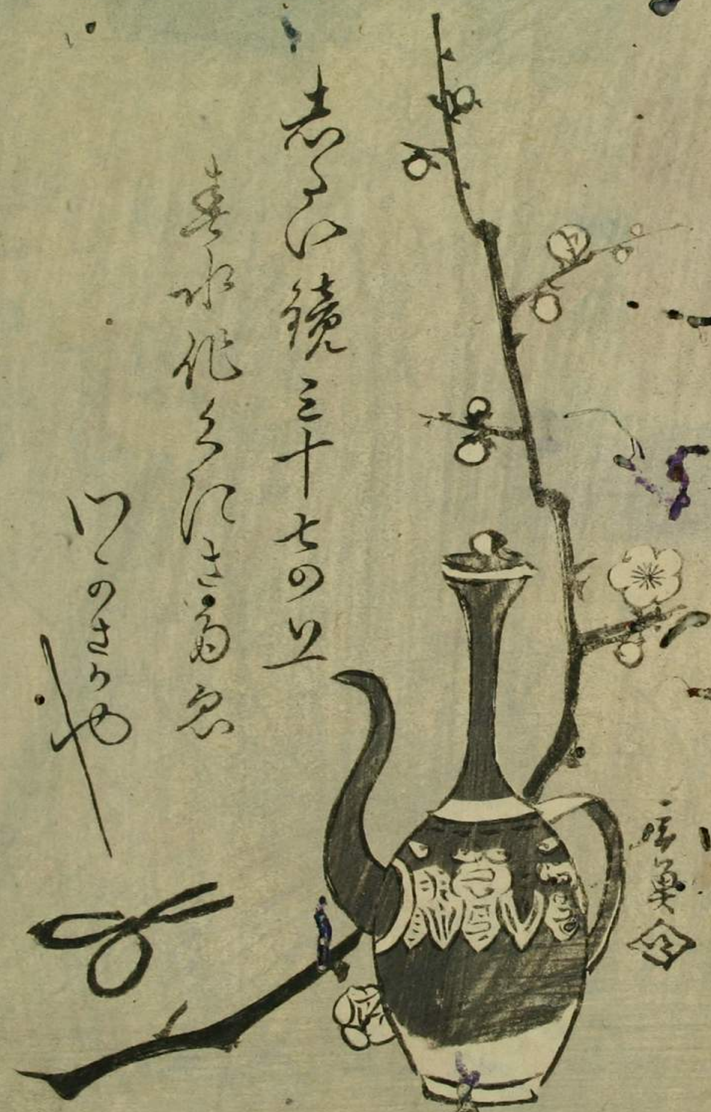
時代の美

三十七篇

爲永春水作

うち川國貞画

板元 若林堂


春の續三十七の立
春水花さき高く
のさかも

美談時代加賀見
三十七編上
為永春水作
梅蝶園貞重
丁卯
彩春
三十七編下
若狭屋梓

時代加賀見
戊辰新春
廿八編上
爲永作
國貞画
若林板
廿八編下

時代かみ手八編下の巻

みぬまち作物雲梅玉貞盛

越の飛馬川に堀井又助ゞ
水中のたゝかひ
本傳一場の見所
なるを予ハ又
是ハ私意を
加へたり

時代三七
船越惣吾李光

かりね
刈根の方

次編ハ出来ル時

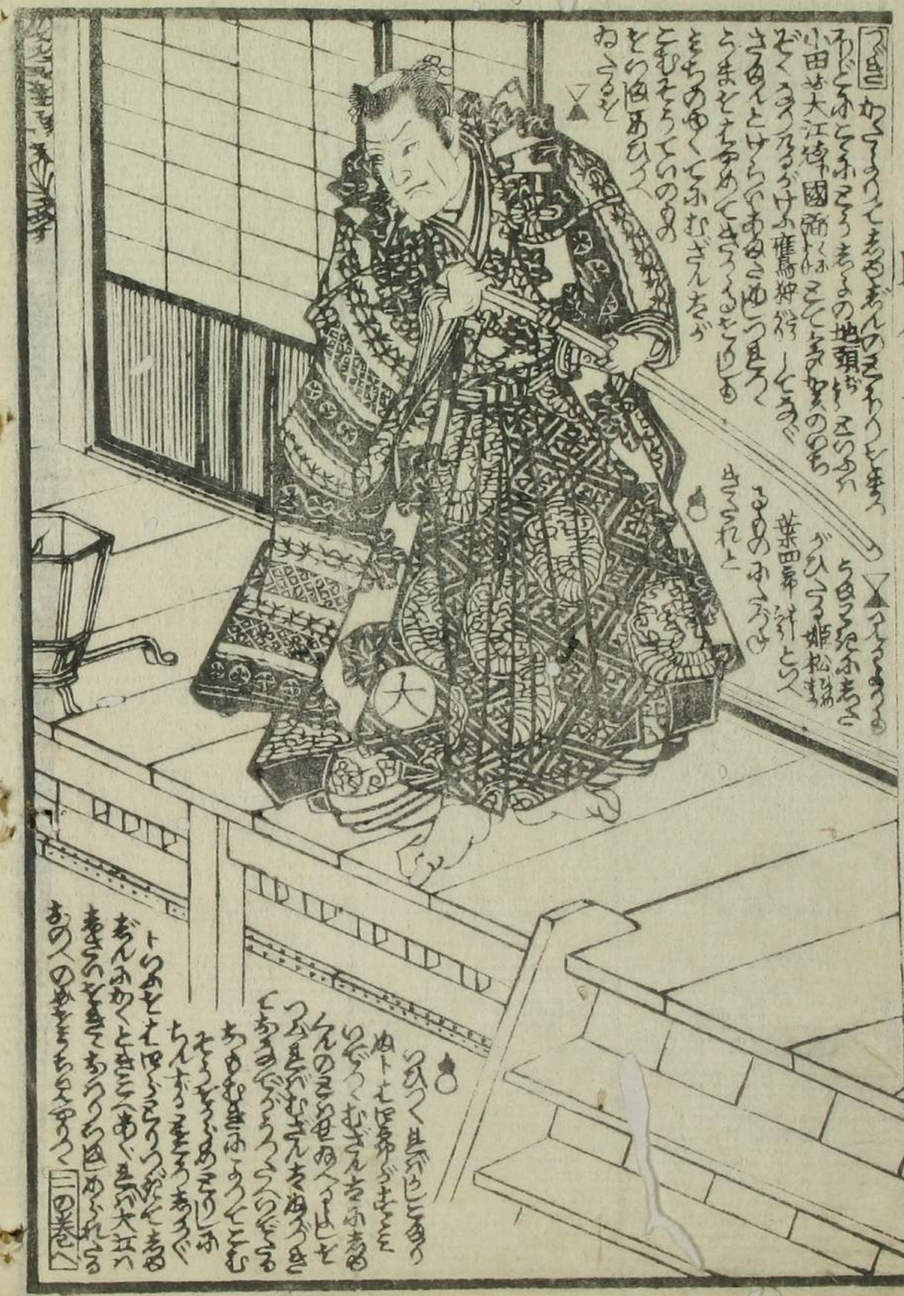
稿ノ出ベキ圖ヲ
反ニ描ノ枯木
ノ物思吾ニ
再ビ春ハ遇
ヘルトイフ
趣キヲ
ウタン
示ス所ヲ
ヒラヽ社ヲ
其ヲ志ル

堀井又助

慶應二稔丙寅新刻

從是北 多賀領

三十六編



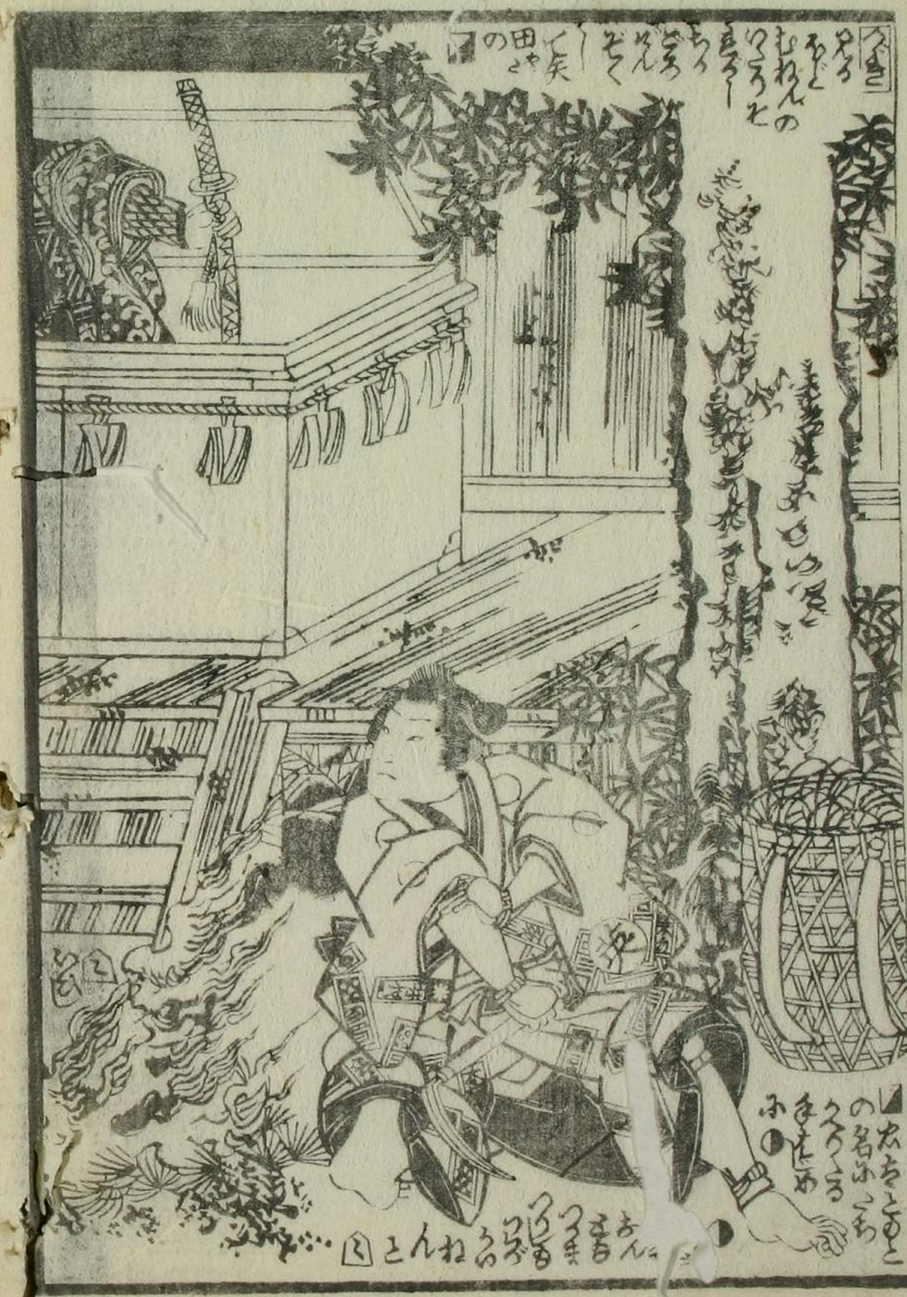
國貞画
春水作

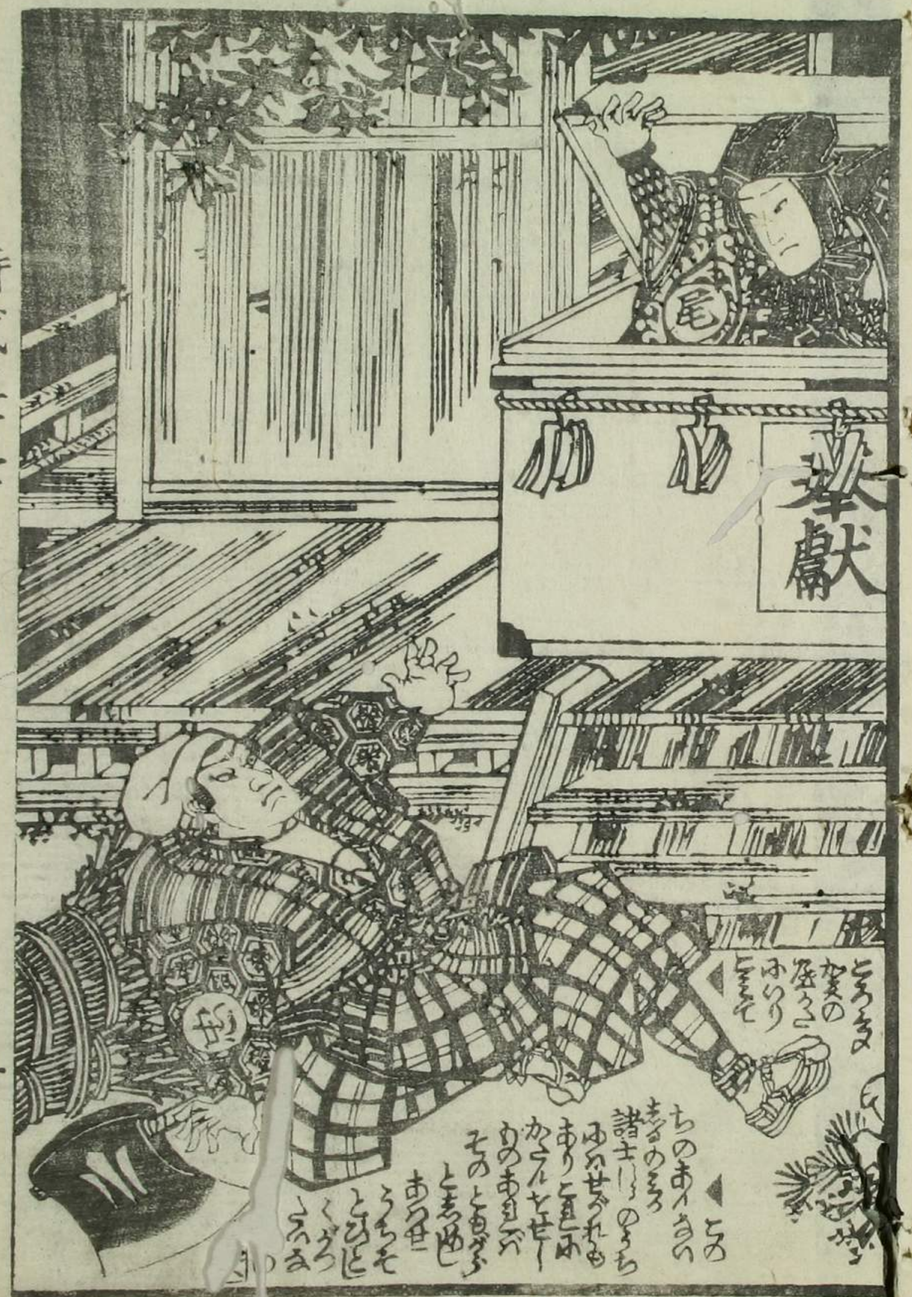
三

尾

孝齋

北お妖星

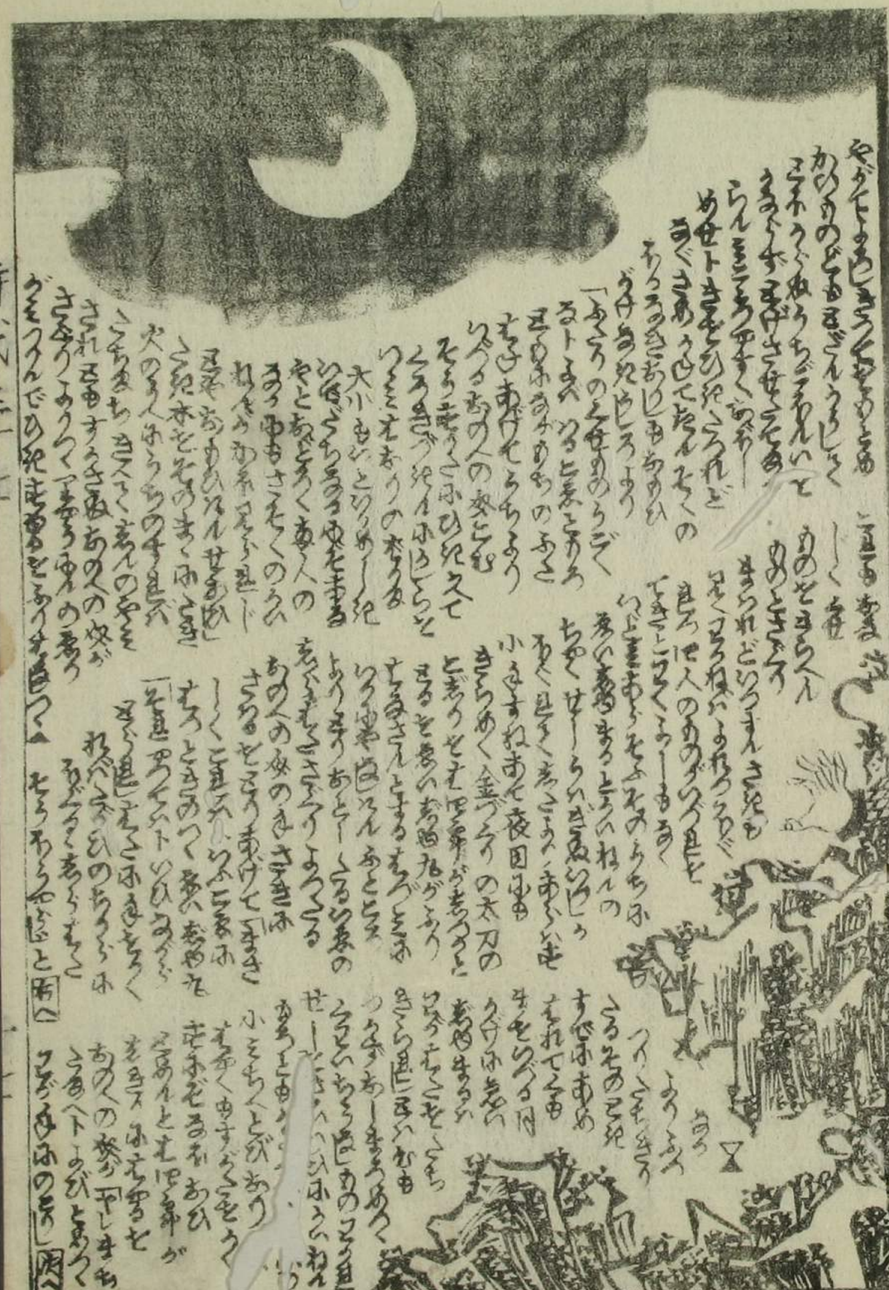


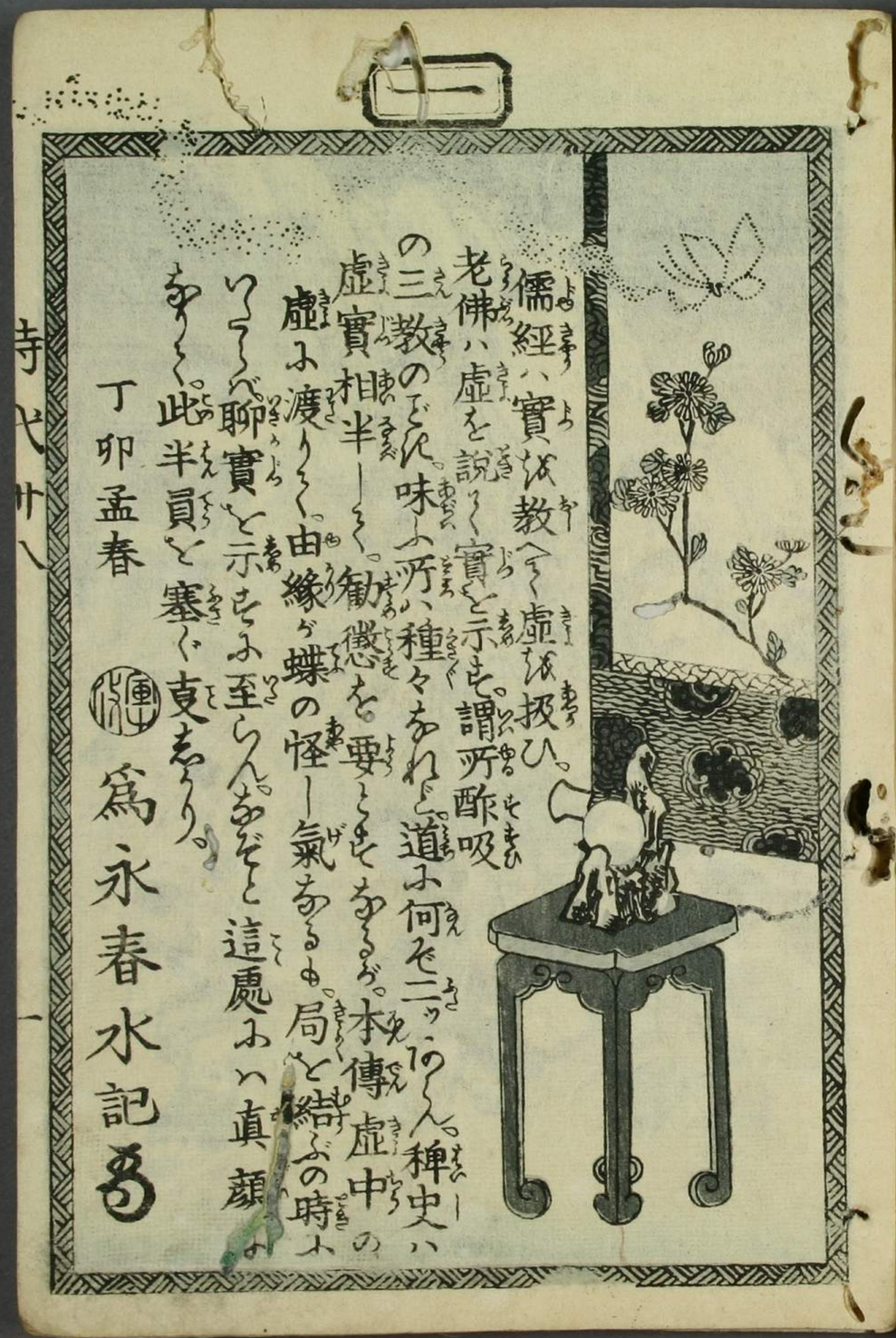

献

英
大

忠
義

尾
丸





儒經ハ實ニ教ヘ〳〵虛ニ扱ひ。
老佛ハ虛を說〳〵實と示す。謂所酢吸
の三教のごとく味ふ所ハ種々あれど道ハ何ぞ二ツ。
虛實相半ばす。勸懲を要ずるなり。本傳虛中の
虛ハ渡り〳〵由緣ゞ蝶の怪ー氣あるも。局と結ぶの時ハ
いつ〳〵べ聊實と示さん至らんあぞと這處ハい眞顏ハ
あり〳〵。此半員と塞ぐ吏ちり。

丁卯孟春

爲永春水記

朝鮮牛肉丸 大包金二朱 中包金一朱 小包百銅
第一ひのもと補ひ丸ん
世いをまもすめやく
なれべきよあすくの人
ゆゑふあひてるゝ
小谷まもんぢり
對ハ
專賣 染崎氏制製

春水作國貞画

傳書六文來

時代十八
藤波の下奴
銅六

初浦の尾上の之助

時代十八
三輪里の處女長者
十六夜

書籍

羽

書籍
由

時代世話
羽
由
五
六

筆
漬
羽

屋
中

當屋
中

潤
正

筆
了

筆
正
由

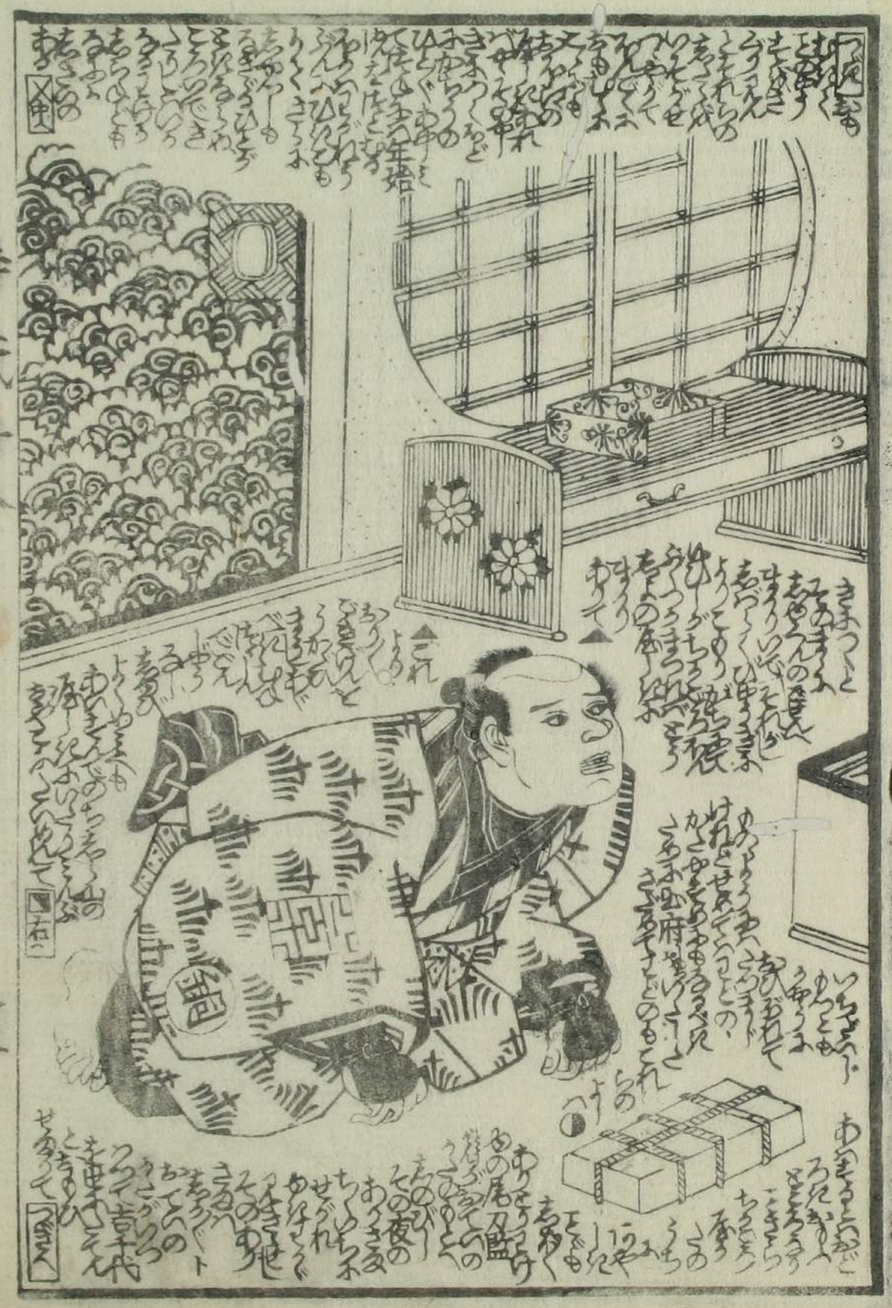
春水作

國貞画

海書箕甲文友

由

正
筆
眞



雪
民

大

この画は第八編の現ーたる圖
まるとぐも重出
し本文を助く

民
雪

大

立
安

刀

刀
立

由
羽
九

明治世相

朝鮮牛肉丸
大色金二朱
中色壹朱
小色百銅

爲永春水作
歌川國貞画

大

淨書 文友

明前本屋書店

慶應四戊辰年新刻目録

北雪美談 時代加賀見 三十八編 四十一編 爲永春水作 歌川國貞画

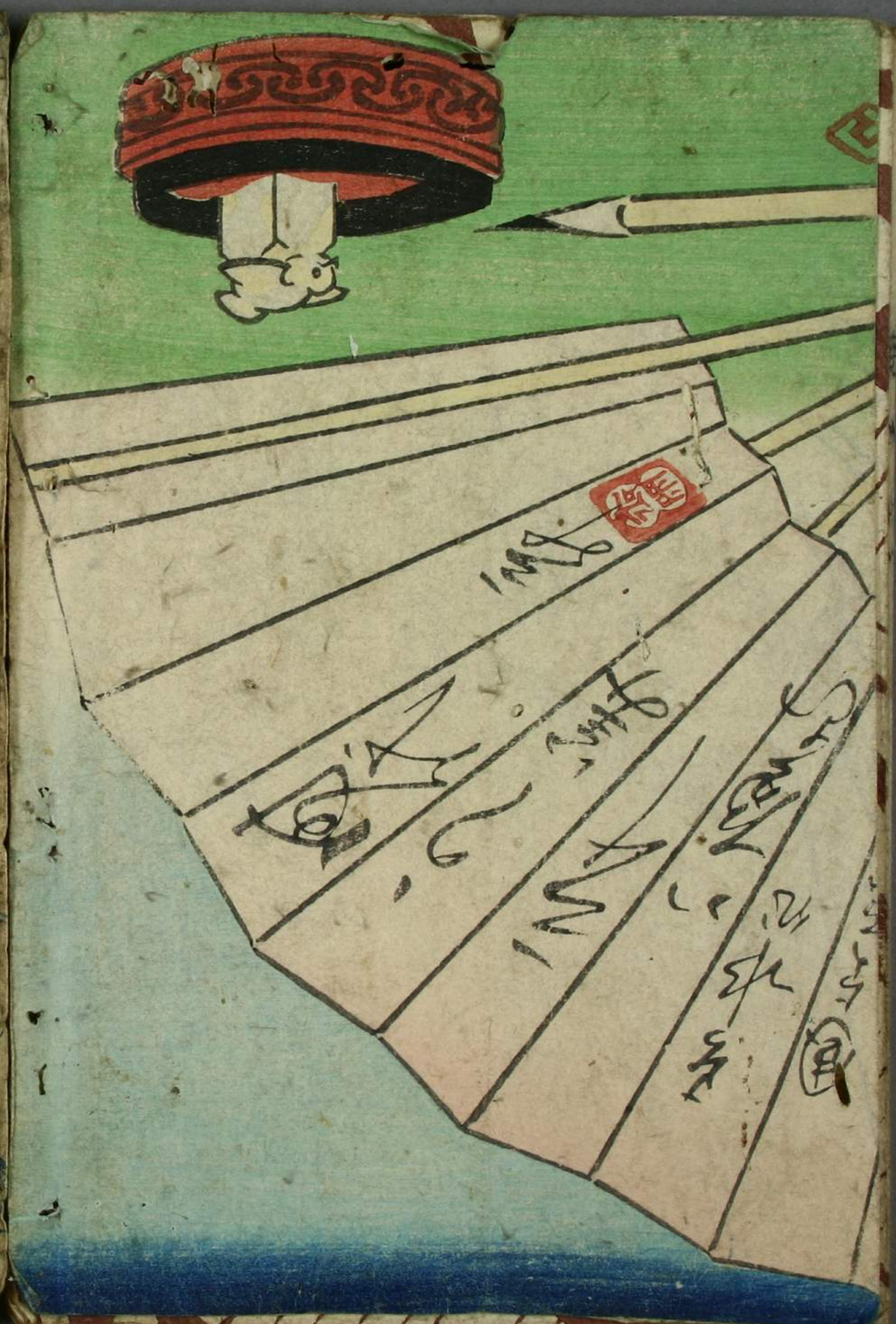
雜談雨夜質庫 六編 七編 出板 爲永春水作 歌川豊國画

池園物語 初編 二編 山々亭有人作 歌川國貞画

庭訓武藏鐙 六編揃 万亭應賀作 歌川國貞画

地本草紙問屋 芝神明前 若林堂 若狹屋与市板

小雪義清
阿波の
四十三番
四十の内
為永さま
ちら国東
為永春樹



口画ふ出せ　艶奴は偶然大津繪ふ
摸擬せ〜が所謂名詮自性なりけん
匾匾頭の長物語は犬の唖な〜座頭の
褌と滅躰无性ふ引張〜鯰は抑えて
飄箪ゐら〜と粘滑と做もの〜〜塗壺
娼婦の携〜藤ふ由縁の春辰が鷹こそ
据ね少年の額髪さ〜いまだ剃さず釣鐘
弁慶ぐん〜〜と奴の鎗わど柔筆紙揮ひ
て四十三輯荒氣の鬼さ〜今頃は發起もぐ拉ど
作者ハ猶硯の海ふ沈を入〜只墨中ふ彷徨の〜

癸酉孟春　爲永春水記

鹽冶判官
妻者

小田大江の女兒
早苗

大
丈
早

時代四十三
村
這画の譯い後の
本文合せ見る

白
民
大

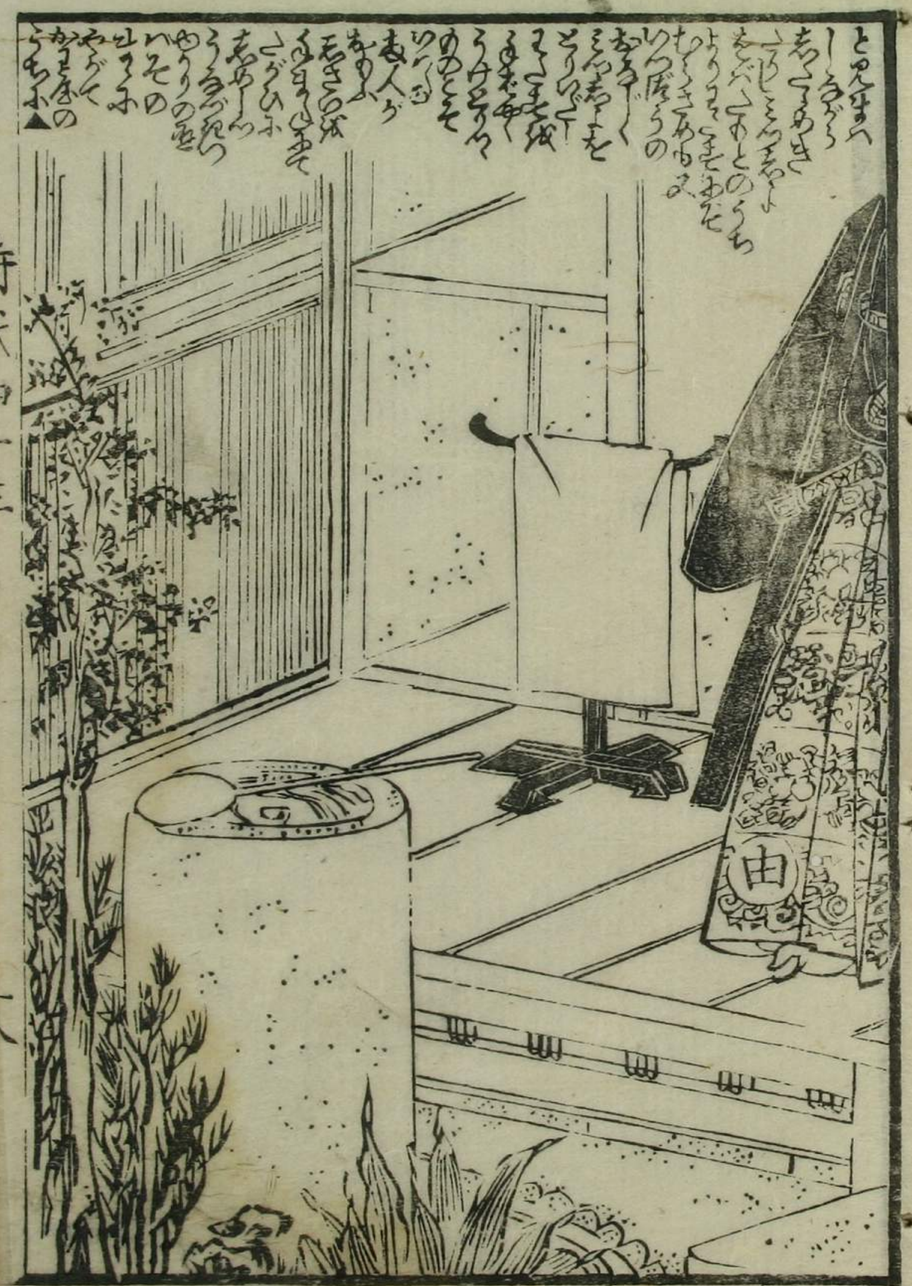
春水作
豊國画

由

稲
大

由

稲



大
須

雲
由

雪

由

一

應神帝の九年そよ武内大臣の弟甘美内あるる者兄を帝ふ讒して曰く臣ゞ兄非望を覬覦し密ふ謀りて三韓を招き九州の地ふ據りて然して後ふ中原を併呑せんの歩のりと帝大いふ駭きゆひ赦て天使を遣して死を賜ふんと為るに其名を直真根子といふ仁容頴甚ざ武内ふ似たるゆゑ今武内の忠を以て斯く誣らるゝ我深く惜み竊ふ代つて自殺せり仍て武内都ふ帰り闕ふ詣りて冤を訴ふ然ども兄弟相爭ふ其曲直を断ずる吏なし是ふ於て神祇ふ盟ひ両人をして湯を探らせふ甘美内ぶ手ふ忽ち爛れ武内ハ手ふ傷る吏なし是湯起請の盟誓ふて綜ハ古傳説ふ載られば世俗の人知る所なれど今本編ふ其俤を聊か假用るを以て婦幼の為ふ記する吏あり

明治八年亥の一月發兒

戯墨堂主人誌

侍女松枝
惡僕銅六

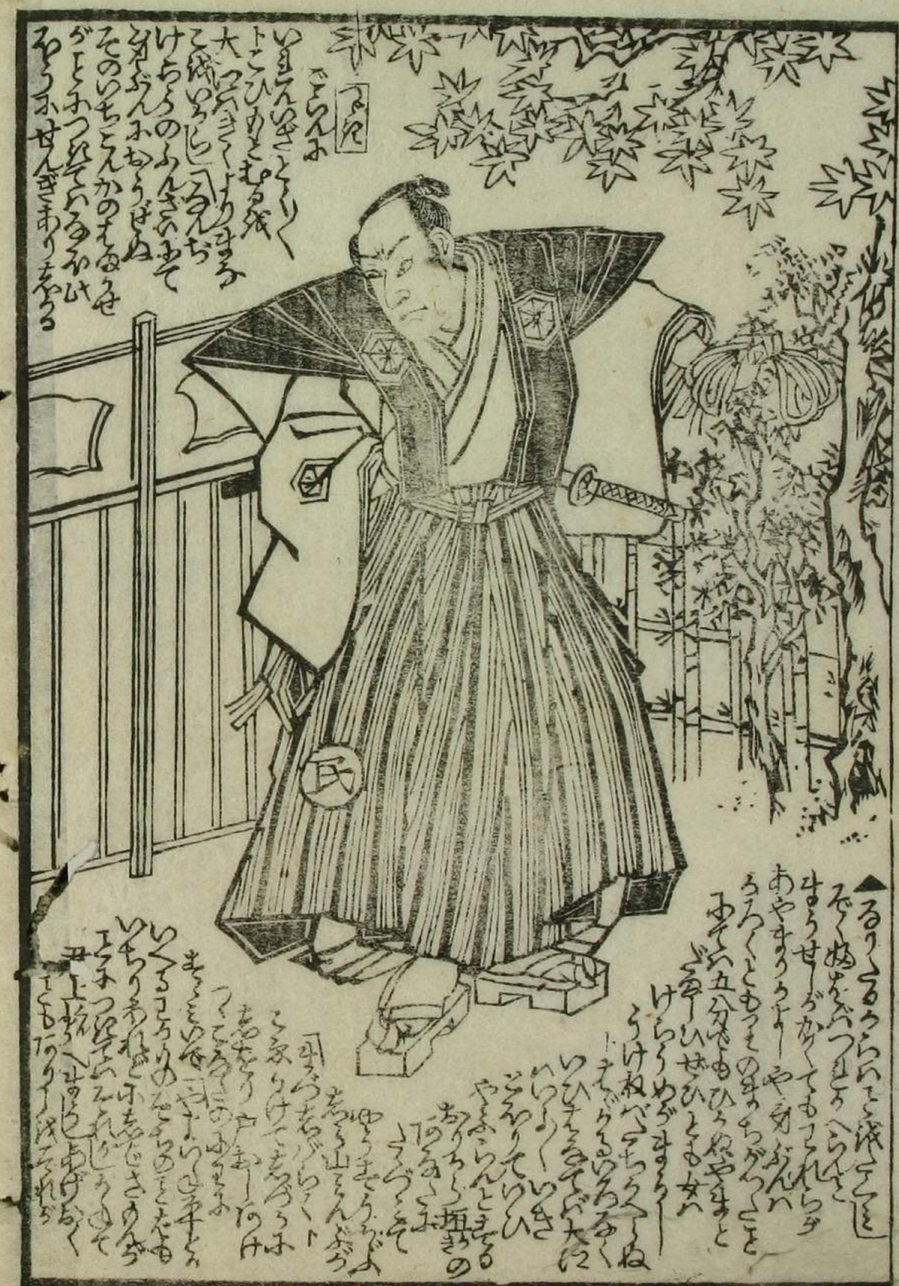
初浦
尾上之助

雪
大

由

雪

由
稲



春水作
豊國画
村

魔

京
蹴

稲
由

朝鮮牛肉丸 大包 金二朱 小包 金一朱

下谷二長町 渋崎氏製

春水作 豊國画

机辺ニ客ヒトリ。予ガ草稿ヲ見テ詰リテ曰。余本傳ヲ閲セルニ。趣向ノ苦シキ所ニ至ルニ。蝶ヲ出シテ其場ヲ逭ル基草双紙ハ春ノ物ナリ。罕ニ蝶ヲ住ノ字ノ餘リ屢出ルハ如何ナル。抑蝶妖ノ術トハ。何ニ因テ這術ノ起ル所ヲ見出シタルヤト。僕窃ニ苦笑シテ。知ラズヤ月ノ晦日ハ。掛乞ヒ帳ヲ持テ走ル者ヲ躲シ留守ヲ使フノ妙術ナリ。帳ト蝶ニハ音相ヒシ然ルニ冊子ハ帳ノ如ク蝶ハ書房ガ負債ヲノガレタル結ビ。

壬申春稿成

爲永春水記

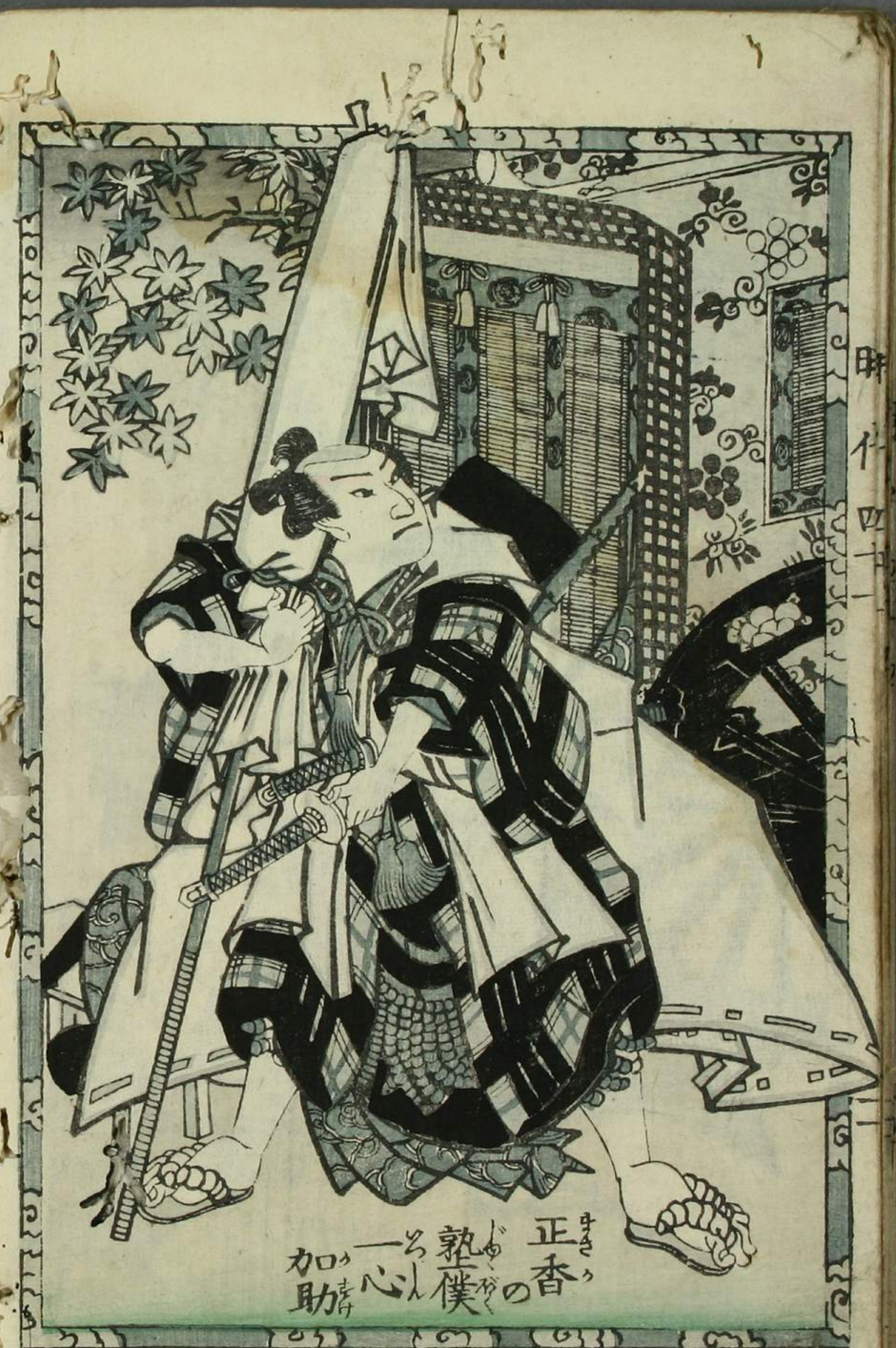
○榛名山の賊長
天狗風の
魔九郎

林間ハ酒をたつとめて
紅葉を焚くとあん
賦したる風流ハ事變ゼど
現ハ時雨降る十月の旬の十日の日の
短さん心ハ雇ハあと諺ハさく言ハ
ふ〻紙僕近頃多忙ゆてたのくらものと俗事ハかゝまた
些九三草紙ハれ無沙汰あるを

春ガ開處ゼで来く居るハ何様
為あると書房〻〻屢言ゼて術あさハ其言譯を
右ハ左と並べ立つ端書ハ換め

春水誌

女盗賊の首領
妙義の稲妻
正香
丹四郎
光照



天下の品物草木禽獸蟲魚甲貝おのゝ三百六十四品の群類
なりといへども此品物いづれもこゝ人間の助となりこゝ人間の害なりの
そゞ中うち虫の部三百六十四品い悉く人間ゑ害あり所い
時候の不順なるより生ずるものゝ中に蜉蝣い綾錦さゝ
ざるに人のこゝろを惑ばせるよりゝ分限を忘れ不敬を生じ
なるひい溷乱の媒となり果い命を殞すとゆいへる然ば凶國の
惡虫なりとて君子い是を惡むべきの蟲も化して蝶となれば
這も一類とえるこゝろい春辰竊ゑ蝶を役して國家を覆さ
んと謀るものゝ虫類ゑ害なりといふその所以ゑ因めるゝあるべけり

丙寅初春　爲永春水記

寺弐三十四
惡漢
毒虫
佐四郎
松の枝

浪花の市客
津出
屋
二三太

風流画半切

越前奉書紙　伊豫奉書紙

狂齋百図全　大錦四ツ切　百枚揃

狂齋画

忠臣義士銘々傳　二ツ切　八十枚揃

猛齋芳虎画

上製　御誂文箱

同　縁包

當年新板　寿式御新年

東都　御年玉進物

若林堂板

五九